



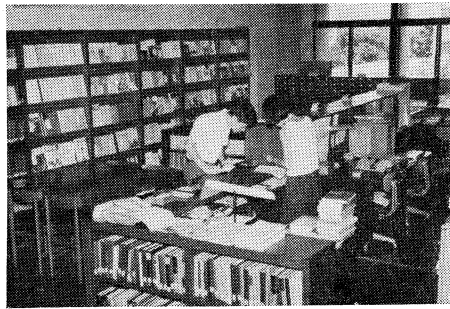
工学部電気系図書室

電気系図書室とは電気、電子、電気第Ⅱの三教室共通の図書室を称してそう呼ばれています。旧図書室から電気総合館に移転して、今年で満5年になり、この総合館の四階全部が図書室にあたるわけです。南北に窓があり、夏は通風がよく、冬は暖房設備があって快適に読書ができます。北窓のながめは以前は申しぶんなくよかったのですが、ここ2、3年前から、土木、建築それに今建設中の大型計算機センターの建物などで、だんだん北山や比叡山の景観がせぼめられ、美しい自然がみられなくなって来ましたが、快晴の日の比叡山はまた格別で、今にも山が迫って来るような威容はこの図書室ならではの風景ではないかと思っています。この近代性を誇る電気総合館のてっぺんの図書室にエレベーターやリフトの設備がないのは致命的で、本の登録や製本などの業務の困難さ、また利用される人たちにも不自由をかけている現状です。

戦後または最近においても図書の種類や数は飛躍的にふえたわけではありませんが、利用者の数は驚くほどふえました。特に外部や他教室の利用者が多くて、これは貸出規則を当教室の教職員、学生と区別せずに全く同じ待遇をしているからではないかと思っています。ここで図書室の目的とか、抱負といったことの概要をお話するとすれば、どこの図書室でも基本的な開架制度が十分普及していないように思うのですが、本来は図書は、書架に眠らせておくも

のでなく、皆んなの人達に活用され読まれてこそ価値があり、ひいてはそれが学問の進歩や発展につながるものなので、余り窮屈な規則は設けないことにしています。それはルーズにすることと違って利用しやすいようにするためです。たりない予算を有効に使う努力は並たいていではないですが、図書委員の教官と相談の上、よい雑誌、資料、書籍を充実していくよう、また新年度はどこに重点をおけばいいかとかいうようなことも話し合います。うっかりしてあの時の本を買いそくなって、二度と手に入らないことのないようにしたいと思っています。

ご承知のように近年工学部は教室がふえましたので、理想をいえば工学部だけの総合図書館が設けられれば末端の図書室との有機的なつながりが保たれ、もっと有効に利用できるのではないかと思います。今の所、お金と人の問題で実現はむづかしいことでしょう。図書室というのは、ただ施設の大きさや物の数だけを自慢しても、かんじんのそれを有効に利用し、より価値のあるシステムにしなければ意味がありません。先ず自館の実力をつけることを主眼にしたいと思っています。更に教職員、学生にいかんにか利用されているか、研究と教育の中枢機関として、どんなに重要視されているか、皆んなよく認識してほしいと思っています。



あとがき ・館内改装工事のため、今夏は長期にわたって閉館をし、その間、皆様にご迷惑をおかけしましたことを深くおわびいたします。本館も昭和23年以來の汚れを一掃、美しく明るい図書館となりました。清涼の秋も間近です。「図書の眠り」を覚すよう、いま一層ご利用下さい。

・「図書収集の盲点」の中にもご指摘下さったように、海外諸大学との連けいを更に密にし、研究紀要等の収集にも力を注ぎたいと思います。

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 5, No.3 (通巻24号)1968年9月15日発行・編集発行人：岩猿敏生 発行所：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電代表771-8111(内線)2220-2238